

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## On "Der allgemeine evangelisch-protestantische Missionsverein"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1985-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 關岡, 一成, Sekioka, Kazushige メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2242">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2242</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 「普及福音新教伝道会」について

関 岡 一 成

## 1

日本プロテスタント史において、「普及福音新教伝道会」(Der allgemeine evangelisch-protestantische Missionsverein)は、「ユニテリアン」(Unitarians)「ユニヴァーサリスト」(Universalist)とともに「自由キリスト教」をもたらしたものとして注目される。欧化主義の波によって順調に発展しつつあった明治20年前後の日本のキリスト教に、外部から「教育と宗教の衝突事件」、内部から「自由キリスト教」の神学が、キリスト教界に動揺を与え、その後のキリスト教の発展を阻止したとされる。おそらく、日本プロテスタント史が「自由キリスト教」を異端とするいわゆる正統主義的キリスト教の流れをくむ人々によって主に評価、記述されてきているところに原因があると思われるが、「自由キリスト教」は否定的に評価される。

それゆえ、明治20年代の「自由キリスト教」については、日本プロテスタント史では大きく取りあげられる割には、「自由キリスト教」をもたらした「普及福音新教伝道会」「ユニテリアン」「ユニヴァーサリスト」の個々の具体的な活動の研究や評価はほとんどされていないのが実状である。筆者は、「自由キリスト教」を異端の名の下に葬り去るのは余りにも一方的に過ぎるし、「自由キリスト教」には、今日の視点からも積極的に評価すべきものがあると考え。そこでここでは、日本に「自由キリスト教」をもたらしたものの内、最も早く日本に渡来した「普及福音新教伝道会」の活動を考察することにした。

この伝道会は「普及福音新教伝道会」の名称のあと、「東亜伝道協会」と名称を変更して日本でかなり長く活動したが、その最盛期、最も影響力のあったのは、ほぼ明治20年前後から25年までの5,6年とみてよい。そこでこの時期の伝道会の活動にその焦点をしぼりたい。

この時期には、二人の宣教師 <sup>(2)</sup>Wilfried Spinner（明治18年—24年日本在住）、Otto Schmiedel（明治20年—25年日本在住）の活動、及びこの二人が主なる執筆者となって発行した機関誌『真理』<sup>(3)</sup>を通じて、キリスト教界に多大の影響を与えた。とくに明治22年に第1号を出した月間雑誌『真理』は、当時評判の高かった『六合雑誌』（明治13年創刊）とともに、レベルの高いアカデミックなキリスト教雑誌として大いに注目された。当時いかに評判であったかは、次の言葉からもうかがえる。

異端とは言はれるものの『真理』丈けば、どうしても読まざるを得ないといふ評判になって、何処の牧師を尋ねても『真理』を必ずその机の上に見出した。<sup>(4)</sup>

ここでは、Spinner, Schmiedel の活動と『真理』を中心に、この伝道会の意義を考えたい。

まず、この伝道会の神学的思想的背景から考察したい。この会の神学的思想的背景については、これまで、山路愛山が『基督教評論』で「ちゆうびんげん、すくうる」<sup>(5)</sup>として以来「チュービンゲン学派」とする意見が多い。限

---

(1) 三波 良, 日本に於ける自由基督教会と其先駆者, 1935年, 309, 579, 637ページ参照。  
 (2) 宣教師としてこの二人のほかは Karl Munzinger (明治22年—28年日本在住) がいた。  
 (3) 「真理」は明治22年10月に第1号を出し, 明治33年129号で廃刊した。  
 (4) 三波 良, 前掲書, 370ページ。  
 (5) 山路愛山, 基督教評論, 岩波文庫, 昭和49年, 89ページ。

谷三喜男氏は『近代日本の形成とキリスト教』<sup>(6)</sup>で、大内三郎氏は『近代日本の聖書思想』<sup>(7)</sup>で、それぞれこの会の背景を「チュービンゲン学派」としている。

この会の神学的背景を「チュービンゲン学派」とするのは、必ずしも誤まりではないが、より厳密には正しいといえない。これについては、Spinner, Schmiedel に直接教えを受けたこの会を代表する最初の日本人指導者である三浪良もすでに明治23年に『真理』誌上で「人又た吾人の執る神学説と、  
独逸のチュービンゲン学派とを混合せんとするも、是れ亦非なり」と<sup>(8)</sup>、自分たちの伝道会が「チュービンゲン学派」とされることに反論している。その他にも、山谷省吾は、「(この会は)必ずしもチュービンゲン学派と関係して<sup>(9)</sup>いたのではない」と否定している。

では、この会の神学的、思想的背景は何であったのか。三浪良、山谷省吾は上述のように、「チュービンゲン学派」でないと反論、否定しているが、では何であるかについては具体的に記していない。筆者は、Spinner, Schmiedel, 『真理』の考察から、「宗教史学派」に属すると考える。

非常に数少ない、おそらく唯一のと言ってよいのではないかと思うが、「普及福音新教伝道会」の研究者である堀光男氏は、この会のドイツの母体についてのドイツ語文献からやはり「宗教史学派」としておられる。すなわち、<sup>(10)</sup>「トレルチと日本伝道—『普及福音新教伝道会』の神学的背景—」の論文で、「普及福音新教伝道会」を支援したトレルチの伝道論を考察して、この会の<sup>(11)</sup>神学的背景として「この会はむしろ正しくいえば、宗教史学派に属してお」

(6) 隅谷三喜男、近代日本の形成とキリスト教、新教出版社、1968年、125ページ。

(7) 大内三郎、近代日本の聖書思想、日本基督教団出版部、昭和35年、21ページ。

(8) 三浪良、日本に於ける自由主義基督教の進歩、『真理』第13号、明治23年10月、13、14ページ。

(9) 久山康編、近代日本とキリスト教—明治篇一、創文社、昭和50年、211、212ページ。

(10) この論文のほかにも同氏の研究として次のものがある。堀光男、独逸普及福音新教伝道会の成立からその日本伝道開始までの事情、東洋大学紀要教養課程篇、第17号、1978年3月。

(11) 堀光男、トレルチと日本伝道—「普及福音新教伝道会」の神学的背景—、『聖書雑誌』日本基督教団出版局、1968年3月号、23ページ。

るとしている。

この会の神学的、思想的背景が「チュービンゲン学派」か「宗教史学派」かという問題は大きな問題と考えるので、次に筆者が「宗教史学派」とする根拠を提示したい。

この伝道会の初代の宣教師で大きな役割を果たした Spinner は、青年時代にインドの宗教に関心を持ち、サンスクリット語も少しインド人から直接に学ばない、インドの宗教に関する小冊子も発行している。また、この頃は未だ比較宗教学はそれほど進歩していなかったが、彼はこの学問に興味を持ち、比較宗教学の祖ともいわれる Max Müller をロンドンに訪ねて教えを乞うている。その際、Max Müller の下で学んでいた日本人僧から、日本の宗教について聞いたりもしている。(ちなみに、Max Müller は、この伝道会のよき後援者でもあった)<sup>(12)</sup>このように来日する以前から、他宗教に対する関心と理解を示し、キリスト教のみを啓示宗教として絶対視しない「宗教史学派」の立場に立っていた。

この彼の立場は、日本に来てからさらに遺憾なく発揮される。この時代の宣教師のほとんどが、キリスト教のみが唯一真実の宗教、日本の宗教は偽りの宗教と信じて疑わなかった中で、<sup>(13)</sup>仏画を自宅に飾り、伊勢神宮に行って非常に感銘を受け教会や教室で「erhaben」(崇高)に打たれたと再三語り、<sup>(14)</sup>また、彼の学生であった三浪良との散歩では、このようなこともあったと後に三浪は回想している。

駿河台の岩崎家の向側の土手に見すばらしい、稲荷の社があった。私共がある日の夕方、その前を通ると、身なりの賤しい、老婆が独り神前に蹲って何やら熱心に祈願して居るのが見えた。先生は私を顧みて云はれた。「お前はあの婆さんを何と思ふ。その祈願の熱心で純真であることは、我々基督教者に優るとも、劣ることはあるまい。お前は決して老婆

(12) 三浪 良、前掲書、384ページ。

(13) 同書、605ページ参照。

(14) 同書、337ページ。

が稲荷の前に額つく故を以て彼女を冷笑してはならないぞ」。こんな教訓を下さったことがあった。<sup>(15)</sup>

さらに『眞理』誌上では、キリスト教と仏教の比較を何度かしている。<sup>(16)</sup> 中でも、仏教に評価すべきものがあることやキリスト教に類似するものがあることを認めるとともに、唯一人格神を仰ぎ高い道徳を持つキリスト教を最高のものとする「宗教史学派」の立場を明確に打出している。『眞理』第1号では、「凡て世の宗教たるもの一として一縦ひ最下の拜物教の如きものと雖も一之を洞察せば、其中心の一粒は必ず眞理に非ざるはなし」と記した。<sup>(17)</sup> この言葉は Max Müller の「世界の諸宗教を正直に独立して研究すると、(略) 幾らかの眞理を含まない宗教は一つもない」と呼応するものである。<sup>(18)</sup>

Schmiedel も、学生時代より比較宗教学に興味を持ち、その勉学から多大の影響を受けた。彼は「神は壺に一度基督教に於て顛れたるにはあらず。多くの人民に種々の有様に顛れたり」と語り、やはり「宗教史学派」に属する者であった。

三浪良は、この伝道会の渡来五十年を記念する書物の中で、Spinner, Schmiedel らの日本での活動にふれて、それまでの英米派の宣教師と彼の師であるドイツ派の宣教師とでは、根本的にどこが違っていたのかについて、次のように述べている。

今迄のキリスト教者は、基督教と他宗教とを全然別なものと考へ、基督教は神より直接に天啓を受けた宗教 *geoffenbarte Religion* であるが、他の宗教は皆自然らず、悪魔の宗教であると信じて居たのであった。併しドイツ派は之を認めない。

(15) 同書、389ページ。

(16) スピネル、神なる概念より基仏両教を論ず、「眞理」第14号、明治23年11月、スピネル、仏教と基督教、「眞理」第15号、明治23年12月など。

(17) これは無署名の論文であるが三浪良、前掲書、347,8ページから Spinner が書いたものであることは明らかである。眞理、「眞理」第1号、明治22年10月、8,9ページ。

(18) F. マックス・ミュラー、比屋根安定訳、宗教学概論、誠信書房、昭和48年、166ページ。

(19) 丸山通一、パルレル、オットー、シュミーデル先生、「眞理」第39号、明治26年1月、8ページ。

独逸派は宗教の書は、唯だ聖書のみならず、一切経にも、古事記にも、經書にも、研究によって宗教的価値を認むるものである。従って神の啓示は、唯だイスラエルに在った計りでない。世界到る處に在り、昔あった計りでない、今日も亦あると信ずるのである。<sup>(20)</sup>

このような例から、この伝道会が「宗教史学派」に属していたとすることは、正しいと考える。

従来、日本プロテスタント史においては、この伝道会の歴史批判的な聖書解釈が、正統主義の聖書無謬説や奇跡理解に衝撃を与えた点のみが大きく取りあげられる。これは誤まりではない。確かに『眞理』に掲載された論文をみても、聖書のインスピレーションの問題、奇蹟論、聖書の各書の解釈に関するものが多い。しかし、この伝道会の日本プロテスタント史上に果たした最大の役割は、「宗教史学派」の立場に立ってキリスト教のみを唯一絶対とせず、日本の諸宗教にも眞理を認めた点にあるといえる。

#### 4

「普及福音新教伝道会」は、「宗教史学派」の立場に立ち、日本の諸宗教に眞理のあることを認める立場から、さらに進んで日本で将来形成されるキリスト教は、日本に適合した形をとるべきであるとした。Spinner は、明治22年10月発行の『眞理』に次のように記した。

日本の基督教は「カトリック」教たるべからず、「メソジスト」教たるべからず、「コングレガチヲナリズムス」(組合主義)、「エписコパリスムス」(監督主義)、「ルーテル」主義、「カルビン」主義たるべからず、又「ユニテリアン」主義、「ラチヲナリズムス」主義たるべからずして、「エス、クリスト」の純粋なる基督教たらざる可からざればなり、而して此の基督教は多年の歳月を経過せば、自ら日本に適合したる歴史的の形を取るべく。<sup>(21)</sup>

(20) 三浪 良, 前掲書, 344, 345ページ。

(21) 「眞理」第1号, 12ページ。

また、『眞理』第8号には、「基督教者の争論と眞理の方針」という論文がある。無署名なので Spinner, Schmicdel どちらが執筆したのか判明しないが、その中に次のようなことが記されている。

吾人は各教派が基督教を解するに、文字に拘泥するの多少あり、精神的の注釈を加ふる多少の別あるを知るものなり。又た吾人は彼此過去の歴史的的信條は、全く其状態を異にせる日本の歴史的関係に適せざるものなるを知るものなり。故に直に之を採て、我国基督教信徒の信條となすべしと勸むるものに非ざるなり。我日本の基督信徒は、將に宜しく自ら其信條を制定す可きなり。<sup>(22)</sup>

さらに、『眞理』第11号には、鉄碩生<sup>(23)</sup>が「日本の基督教」を発表して以下のように記している。

吾人は日本の基督教が果して日本の基督教たるの日を待て之れを歓迎せんと欲するものなり（略）一箇人に偏癖あるが如く、一国民も亦た基督教を見る事各々少しく異るところあるを免れざるなり。人若し地上を周遊し比較を試みたらんには、忽ち先づ茲に着眼せん。（略）宗教は国民の特性に化せらる。然らざれば、自から外部に属するの觀ありて力を逞ふする能はず。夫れ然かり、然かるが故に基督教も亦た日本国民の特性に同化せらるるにあらざる以上は、日本に於て潜在の精気たる能はず。<sup>(24)</sup>

これは「日本的キリスト教」の主張とみてよい。ただ、ここで注意したいことは、日本プロテスタント史において、明治20年代以降に主張された「日本的キリスト教」は、日本主義、国家主義に迎合して、キリスト教をゆがめて成立したものと評価が定着していることである。そこで、この伝道会の主張した「日本的キリスト教」は、それらとは一線を画するものであることが明らかにされなければならない。

まず第一に、この伝道会の主張した「日本的キリスト教」は、日本主義、

(22) 「眞理」第8号、明治23年5月、5ページ。

(23) 鉄碩生のペンネームが誰のものか判明しない。

(24) 「眞理」第11号、明治23年8月、6,7ページ。



国家主義からキリスト教を守るために、いわば保身のために、唱えられたものではないことである。年代的にも、キリスト教が未だ順調な発展を遂げている時にすでにこれを主張している。この伝道会の「日本的キリスト教」は、天皇制絶対主義下でキリスト教の存続し得る道を模索する中で主張されたものではない。この伝道会の「日本的キリスト教」の主張は、「宗教史学派」に立つところに由来するものである。

第二に、この伝道会は、「日本的キリスト教」が実現するためには、非常な困難があることを最初から明言していたことである。説教で日本主義を鼓吹し、義太夫の一節をうなる、<sup>(25)</sup> というようなことで可能になるものとは考えていないのである。この伝道会の「日本的キリスト教」が如何に堅実なものであったかは、その実現には以下の二つの問題を克服して初めて可能としている点にもよくあらわれている。

第一の問題は、純粹のキリスト教、キリスト教の本質を明確にすることである。

米国英国仏国独国魯国等の伝道会が齋らせし奇異の分子、并びに羅馬法、希臘哲学及び一尚ほ一の加ふべきもの一基督教に潛入したる猶太学派の基礎に建てられたるものを云ふ、此の主旨を貫徹して純粹の基督教を拡張せんと欲せば、欧土に産じたる教義の信仰及び教会の生活をも排除し、新約全書中の基督教の永劫なるものと、猶太的希臘的の一時なるものとを区別せざるべからず。<sup>(26)</sup>

第二の問題は、日本の歴史、国民性、文化の特性、とくに日本の宗教上の特性を明らかにすることである。

このような困難な問題を解決して、キリスト教の純粹なものと、日本の特性を化合、接合したところに「日本的キリスト教」は成立するとみたのである。

---

(25) 三浪 良、前掲書、481ページ参照。

(26) 「真理」第11号、9ページ。

冷静に考えれば、このような意味での「日本的キリスト教」の実現が如何に困難であり、その実現には年月を要することは明らかである。Spinner, Schmiedel は、キリスト教は理解しているという確信を持っていたが、日本の宗教などの特性はよく理解していないという認識から、「日本的キリスト教」は、日本人キリスト者によって将来実現されるべきであるとしていた。Spinnerは、日本に6年滞在しかなり日本の宗教事情、文化にも通じていたが、日本の宗教の特性を断定して、「日本的キリスト教」の具体的な形を示すようなことはしなかった。<sup>(27)</sup>

5

先述のように、明治23,4年以降、日本のキリスト教はそれまで順調に発展して来たのが阻止されることになる。最大の原因は、天皇制絶対主義、国家主義の確立が障害となったのであるが、この時期にキリスト教内部で、「日本的キリスト教」が唱えられたことが、結局キリスト教の変質を招きキリスト教から生命力を奪い、キリスト教界に混乱を生じさせたのもその原因とされる。

明治20年代後半に続出する「日本的キリスト教」は、天皇制絶対主義、神道、仏教、儒教とキリスト教が相容れないものではないということを骨子にしている。このような思想は、確かに日本の伝統的思想や宗教にも真理を認める「宗教史学派」の立場に立って初めて可能なものといえる。その意味では、この伝道会の「宗教史学派」に立っての発言が大いに刺激となったことは事実とされなければならない。ただ、何度も指摘するように、この伝道会

---

(27) 彼が如何に慎重であったかは、三浪に語った次のような言葉からも明らかである。「先生は去るに先だって私に話された。『自分は六年も日本に居たが、日本を解したとは少しも思はない。到着後一ヶ月すると、日本に就て五巻位の著書は出来ると思った。三ヶ月たつと三巻位かなと思った。一年たつと一巻位しか書けまいと思ったが、三年後にはもう日本は分らなくなって、筆を取ることは出来なくなった。日本を解すことは我々には一朝一夕のことでは出来ない』此の言葉をワイマーでも私に繰り返して云はれ『お前も独逸を解したと思ふなよ』と誂められた」(三浪 良, 前掲書, 387, 388ページ。

の主張した「日本的キリスト教」とその後に出た「日本的キリスト教」とでは同一のものでないことである。このことは、「日本的キリスト教」というと、「それは国粹主義の圧迫に堪え得ず、相容れないものを混淆しようとするものに過ぎなかつたのであり、その本質において日本的倫理へのキリスト教の妥協降伏に外ならなかつた。それは最も賢く見えて最も愚かな途であつた<sup>(28)</sup>」とされることが多いので、くれぐれも注意したいことである。筆者は、この伝道会の「日本的キリスト教」には、この批判は当らないと考える。そこで、再度具体的な例を示しながら、この伝道会と他の「日本的キリスト教」の相違するところをみることにしたい。

明治23年6月、横井時雄は『六合雑誌』に「日本将来の基督教」を發表した。その中で彼は次のように述べた。

今日我邦に行はるる處の基督教は、多くはこれ英米のキリスト教なり。教会の神学、及び信仰の生活は正さにこれ英米の風に模倣したるものなり。未だ以て之を日本風の基督教と稱すべからざる者あり。余輩の見る處によれば、過去三十年間創業の時に當り、西洋在來のものを持し來りて之を試植せしことは、策の尤も得たる所のものにして、勢他に良策あるべからず。然れども今日となりては、我邦の教会も大に進歩し、且実験によりて欧米種の良否を判別するを得るの時に立ち至れり。これより以後こそは、日本風の基督教を發達する機會到来したるなれ。此機會に乗じて我日本風の基督教を宣伝せば、天下の人必ず靡然として之に服せん。これ実に策の尤も得たるものと謂う可きなり。(略) 欧米基督教はギリシャの文学、ロマの法理を用いて以て斯の如く發達したるなり。將に東洋に起らんとする處の基督教は、儒仏の文明の上に立てざる可らず。(略) 現今の有様によればキリスト教は今後海外の衣服を脱して日本風と化せざれば、決して我邦を教化するの目的を達すること能はざるべし。<sup>(29)</sup>

(28) 隅谷三喜男、前掲書、132ページ。

(29) 横井時雄、日本将来の基督教、「六合雑誌」第114号、明治23年6月、1,2,4ページ。

横井時雄のこの「日本風キリスト教」の主張は、日本人キリスト者の指導者の中で最も早く「日本的キリスト教」を主張したものの一つであり、『六合雑誌』という有力な誌上に発表されたもので、非常に注目されたものであった。

『真理』は、一早くこの論文を取りあげ、横井の「日本風キリスト教」の概念には賛成する、また日本宗教上の特性を化合して「日本風キリスト教」の基礎とすることも間違いではないとした上で、次のように批判した。

然るに横井君は更らに数歩を進めて、日本将来の基督教の基礎として、釈迦の宗教と孔子の哲学とを採らんことを望めり。西土に於て希臘文学と羅馬法理とが基督教の基礎たりしは其論拠なるが如くなれども、是れ道理に似て非なるものなり。(略) 神道、仏教及び儒教が日本人の宗教上の特性の基礎なりと云ふは誠に正だしき論なり。去りながら是等の諸勢力を日本将来の基督教の基礎と為さんと望むは如何はしき事なり。

(略) 誠に思へ、例令へば基督教の神学を仏教の基礎に置いて説くとせば、如何なる物が出て来るや。暫く之れを措いて問はざるも如何にして斯かる業を始むべきや。覚束なき事にあらずや。(略) 畧言せば、吾人が日本将来の基督教の為に請求するところ次ぎの如し。従来宗教上の諸勢力殊に仏教を基督教に混入すべからざる事。其他の文化の要素殊に支那文学は依然其進路を行かしむる事是れなり。如何なる場合にも日本の基督教は日本の特性の上に立つべき事を忘る可からず。果して然らば、日本の基督教自から其自然の形を得べし。然れども是れ一朝にして成るべきにあらず。<sup>(30)</sup>

これを読めば、この伝道会の「日本的キリスト教」が、日本の伝統思想や宗教に真理のあることを認める立場に立つとはいうものの、直ちに仏教、神道、儒教と混合して、「仏教的キリスト教」「神道的キリスト教」「儒教的キリスト教」を唱えて、それを「日本的キリスト教」とするような安易なもの

(30) 鉄碩生、日本の基督教の基礎、「真理」第12号、明治23年9月、10、11、12ページ。

でなかったことは明らかである。

## 6

以上の点からも明らかなように、この伝道会の主張した「日本的キリスト教」は、他の「日本的キリスト教」とは異なったものであり、今日の視点からもその主張するところは正しいものであったといえる。ただ残念なことに、明治24年に Spinner が、翌年には Schmiedel が帰国したことや、時代が急激にキリスト教に反対する社会風潮になったこともあり、地道にこの伝道会の目指すような「日本的キリスト教」形成への努力は為されず、即成の「日本的キリスト教」が続出することになったのである。考えれば、つい数年前まではキリスト教のみが唯一絶対の宗教であり、日本の諸宗教には真理はないとしていたキリスト者が、仏教、儒教、神道とキリスト教を結合させて「日本的キリスト教」を唱えたのだから、そこに誤まりがなかったら、その方が不思議といえる。いや、逆説的にいえば、そんなにいとも簡単に神儒仏教とキリスト教が結びつけられたということは、もともとキリスト教受容にあたって神儒仏教や伝統思想と本格的な対決や絶縁がなされないまま受容が行なわれていたことを示し、キリスト教理解そのものに問題があったともいえる。

(この論文は、1985年9月15日、日本宗教学会第44回学術大会で発表したものに加筆したものである)